

9月初旬、調査旅行でニコラエフスクを訪れた。ハバロフスクから乗ったMH24（プロペラ機）で、「座席は自由」と聞かされ、ソ連時代を知る外国人（筆者）はさほど驚かず、ロシア人の若者たちがびっくりしている姿を見て、ソ連崩壊から四半世紀が過ぎようとしていることを改めて実感した。

さて、アムール川下流域に位置するニコラエフスクは、1920年春、バルチザンによる虐殺事件、いわゆる「尼港事件」の現場である。軍人、外交官とその家族、民間人など、およそ700人の日本人が犠牲となったこの事件は、当時の日本を震撼させた。

われわれ一行6名は、雨の中、郷土史家のエレーナさんの案内で、日本領事館跡、ピョートル・ニコラエヴィチこと島田元太郎が事件後再建した「島田商会」（現在は郷土史博物館）、日本軍兵舎跡、そして殺害現場となったアムール川河畔を訪れた。

郷土史博物館では、学芸員の年配の女性から事件について淡々とした口調で説明を受けた。町の小中学生も、授業で博



島田元太郎が事件後再建した島田商会  
（現在は郷土史博物館）

物館を訪れ、事件について学んでいるようだ。

ここで忘れてはならないのは、ロシア人住民もバルチザンの犠牲者となったことだ。正確な数は不明だが、反革命派や資産家が惨殺され、また町から退却するバルチザンに連行された住民たちが、徒歩でタイガ（針葉樹林）を移動中、食糧不足から殺され、あるいは脱落者は見殺しにされた結果、住民の半数近くに相当する3,000から4,000人が亡くなったと言われている。

歴史をひも解けば、ニコラエフスクはウラジオストクにその地位を譲るまで、極東の拠点だった。

函館からは日本人漁業者が鮭鱈の買い付けにやって来た。幕末開港期には、初代駐日ロシア領事ゴシケーヴィチや修道司祭ニコライが、ここから日本（函館）へ出立した。

ハバロフスクに戻る早朝、アムール川河畔に向かってホテルを出た。しばらく歩くと、ひしゃげた木造平屋を取り囲む板塀の陰から聞こえる番犬の唸り声に威嚇され、川まで行くのをあきらめた。前日訪れた日本軍兵舎跡でも、野犬が住み着いていて近寄るのは危険だとして、レンガ造の元兵舎への立ち入りを断念した。人口過疎のロシア極東の地方都市では、野犬や番犬をよく見かけるものだが、ここニコラエフスクも、ソ連時代は人口5万人強を数えたそうだが、今や2万人以下にまで減少している。

「尼港事件は、国内戦争中に起こった事件の一つ。」「退却時に町を焼き払うという戦術は、ナポレオン戦争でもとられた。」などと、首班のトリアビーツインの行動を擁護するかのような発言をする博物館学芸員。「バルチザンによる町の破壊がなければ、ウラジオストクやハバロフスクのように帝政期の重厚な建物が残っていたはず。その後の町の発展の仕方も違っただろう。」と語るエレーナさん。ロシア人にとっての「尼港事件」について考えさせられる旅でもあった。

（ロシア極東連邦総合大学函館校准教授）